

# 時代を駆け巡る 古都・奈良

京奈和自動車道の一部、大和北道路(木津〜大和郡山)が今春、全線事業化された。物流広域観光の活性化に弾みがついた古都・奈良を訪ね、古代から現代に至る長大な歴史のうねりと、国づくり・街づくりの変遷をたどった。

復原された朱雀門。門前に今春、「朱雀門ひろば」が整備された



## 平城宮

「天平のロマン」に想いを馳せて、平城宮跡を歩く。

広場のように見えるが、それは平城京のメインストリート「朱雀大路」の北端で、幅員はなんと74m。同44mの大坂御堂筋も驚くスケールだ。この春、平城宮跡歴史公園内にオープンした「朱雀門ひろば」に再現されたもの。両脇に、ガイダンス施設「平城宮いざない館」や、観光交流スペース「天平うまし館」などが設けられ、国内外の観光客で賑わっている。

奈良に造営された都は、飛鳥・藤原・平城の3つ。最後に登場した平城京は、唐(中国)の長安城をモデルとし、74年間、律令制のもと日本最大の都市として栄えた。その東部に四角く張り出す形で「外京」が設けられ、北端中央部に、都の中枢「平城宮」が置かれていた。

朱雀門は、平城宮の正門である。門前では、新羅や唐など外国使節の送迎や、大勢で歌を詠み合う歌垣などのイベントが行われており、壮観だったに違いない。平成10年に復原工事が完成し、約1000㎡の国産ヒノキ、4万2000枚の瓦を使った威容を現した。金属板や筋交いで構造補強も行われている。

朱雀門ひろばの東側にある「平城宮いざない館」は、復原模型や古代人の人形、出土品などによって平城宮を体感できる施設だ。釘を使わない「組物」などの技術を使った構造模型(第二次大極殿1/5)が興味深い。一方、ひろばの西側に建てられた「天平うまし館」では、遣唐使について学び、復原遣唐使船に乗り込める。レストランやカフェも併設。朱雀門から近鉄線を越えて北へ歩くと、第二次大極殿南門の復原工事が始まっている。基本的に古代の工法・材料が用いられており、土を突き固めて塀を築く工法「版築」や、手斧など古代の道具について、隣接する「復原事業情報館」で解説している。動画の上映も楽しみたい。

### 温故知新、平城外京の「ならまち」を訪ねる。

784年の長岡京遷都の後、794年に京都で平安京が開かれ、平城京は歴史の表舞台から姿を消す。しかし、前述の外京、つまり東に張り出す四角いエリアにあった興福寺や元興寺、外京に隣接する東大寺、春日大社は奈良に残った。元来、平城宮の人々は、山ざわに寺社の連なるこの地域を、神聖な場所として仰ぎ見ていたようだ。平安遷都後も、ここに神社は残り、門前に「郷」が形成された。宗教関連の仕事に携わる人々の集落である。



朱雀門を守る衛士(えし)



1. ガイダンス施設「平城宮いざない館」の外観
2. 「天平うまし館」に付設する復原遣唐使船と「せんとくん」
3. 「朱雀門ひろば」の全景パース
4. 人型の看板で当時をイメージできる「平城宮いざない館」。人型の裏には、モデルとした役人の名前・仕事内容・年取などが書かれている



- 5 第一次大極殿の復原整備模型(1/200)
- 6 同院の「復原事業情報館」
- 7 同院南門の復原工事



# 柳生の里



**柳生十兵衛杉**  
13. 柳生十兵衛が旅立つ前に植えたと言われる十兵衛杉

**陣屋跡**  
12. 史跡公園となっている旧柳生藩陣屋跡



8. 虫籠(むしこ)窓、白壁、格子の古民家が点在するならまち 9. 旧元興寺本堂跡「吉祥堂」 10. 11. 奈良市が購入し、保存・活用する「奈良町にぎわいの家」



ならまち

庚申さんのお使い「身代わり申」

## 「柳生秘伝！新陰流剣術の古里」柳生街道を行く。

春日大社から東に向かって伸びる柳生街道。社

平城宮周辺は荒廃して田や畑になっていったが、その文化や人々の思いは外京に伝えられ、現在の奈良中心部に受け継がれている。かつての外京、のちに「奈良町」と呼ばれた地域へ向かった。

奈良市奈良町にぎわい課の徳岡課長に話を聞き、案内を請う。江戸時代は、奈良奉行所の支配下にあったという奈良町。筆・墨・蚊帳・酒など、多様な産業が発展し、17世紀末には人口3万5000人を数えた。現在は範囲を広げて、「ならまち」、北の「奈良きたまち」、「京終」を合わせて奈良町と呼んでいるようだ。

「ならまち」には、間口が狭く奥行き深い伝統家屋が点在している。軒には、猿をかたどったお守り「身代わり申」が、モビールのように吊るされている。道は狭く、曲がっていたり、坂になっていた。防火意識を高めるため、市から各家庭に消火器や赤いバケツを配ったこともあるという。

1917(大正6)年に建てられた古民家「奈良町にぎわいの家」を見学した。元・古美術商の住まいとあって、かまどを備えた通り庭、3つの座敷、中庭、離れ座敷のそれぞれが風趣に富む。仏間は広く、天井絵も描かれていた。一般公開し、工芸などの展示やイベントの会場としても利用されている。

領の春日原生林を縫うように続く「滝坂の道」には、石仏や石窟仏が、眠るような風情で祈りを捧げている。荒木又右衛門をはじめ、剣豪・剣客が「柳生の剣」を求めて往来した。柳生新陰流の道場があった柳生の里へ通じているためだ。

滝坂の道の終点が円成寺。運慶作の大日如来像(国宝)など多くの宝物を安置する名刹である。緑なす池の向こう、宙に浮かぶように佇む楼門は目と心を清める。なお街道を進み、柳生の里へ至る。

柳生石舟斎宗厳が創始した新陰流は、無刀取りの抜かざる剣「真剣白刃取り」で名高い。徳川家康がこの剣に感激し、宗厳とその子・宗矩を將軍家の兵法指南役とした。のちに、宗矩は柳生藩1万2500石を与えられる。

宗矩が3年の月日をかけて建てた、454㎡の「旧柳生藩陣屋跡」は、火災および廃藩置県により消失するが、跡地は史跡公園として整備され、春は桜の名所に。立派な石垣の上に建つ「旧柳生藩家老屋敷」は一時期、作家・山岡壮八の所有となり、宗矩の生涯を描く「春の坂道」の構想もここで練られたとか。また、里の北側には宗矩の子・十兵衛が植えたという杉が、落雷によって枯死した白い姿を残す。

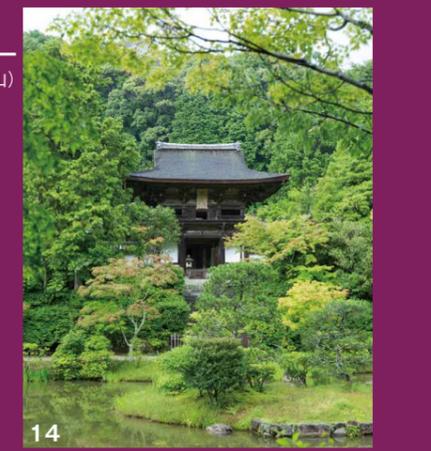
古代から現代まで、さまざま時代の鼓動を秘めた奈良。この6月にも平城宮跡で厨房跡が見つかり、新たな発見・研究は絶えることがない。奈良の歴史ロマンは、過去から未来へと今も駆け続けている。



15. 16. 見事な石垣をもつ旧柳生藩家老屋敷



14. 柳生街道随一の名刹・円成寺(忍辱山)



16

14

市民主体のまちづくり活動と、自治体の継続的事業の結晶。

奈良市観光経済部 奈良町にぎわい課長 徳岡 健治さん

平城京の外京に形成され、寺社・商工業観光のまちとして発展してきた奈良町。太平洋戦争の戦災を免れ、古い木造町家の密集するこの地域にも、やがてモータリゼーションの波が訪れました。

昭和50年、交通・防災街路としての役割を果たす都市計画道路(現・ならまち大通り)の建設が決定。これをきっかけに、周辺地域の若者が町並み保存や活性化を考える活動をスタートします。奈良市も保存に向けた調査や補助金交付を開始しました。

平成4年には、市民活動組織の構想を取り入れて「ならまち賑わい構想」を策定。この頃から、住民当事者の意識も高まり、パブルによるマンション建設への反対運動が起こります。市は同構想に基づき、用地や建物の買い上げ、観光文化施設の建設、防火対策などの住環境整備を推し進めました。

そして昨年、暮らし・生業・観光の相互循環を目指し、「新奈良町にぎわい構想」を策定。奈良きたまち、ならまち、京終(きょうはて)を中心に、多様な施策に取り組んでいます。奈良町のまちづくりは、市民・住民の自発的活動と、自治体の補助事業等との相乗効果によるもので、その先駆的な事例として全国に知られています。

